
詩歌・小説の中のはきもの (第13回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

129 軀の重心が高い位置にあり、弾力のありそうな丸い尻をくりくりと動かして、大きな歩幅で歩いて行く。チューインガムを噛んだりビールを飲みながら歩いている者もいた。

私は、あんな頼りなくだらしのない兵隊に負けたのか、と懽然としながらも、いかにも栄養のよさそうな軀つきや、身につけている上質の軍服、丈が短いため一層足が長く見えるジャンパーや、かみそりの刃のような折目のついたズボン、新しい本皮の軍靴などを見て日本は物量で負けたのだ、と改めて思わずにはいられなかった。

津村節子

★『星祭りの町』から。ジョンソン飛行基地に進駐してきたアメリカ軍兵士を少女の目はこのように受け止めた。「本皮」という言葉に注目して欲しい。戦争末期は、鯨・豚・犬などの「代用革」ばかりであった。それさえも手に入らず、昭和18年9月3日、大蔵省は官吏の下駄、草履での登庁を許可すると通達し、翌年12月になると、軍需省が飼い犬の強制供出を決めるに至ったのである。

130 貧乏士族のことであるから、自分で色々工夫して、下駄の鼻緒もたてれば雪駄の剥がれたのも縫うということは私の引受けで、自分のばかりではない、母のものも兄弟のものも繕うてやる。…ソレカラ進んで本当の内職を始めて、下駄も

^{こしら}えたこともあれば、刀剣の細工をしたこともある。

福沢諭吉

★『福翁自伝』から。孔子は鄙事^{ひじ}に多能なることを恥じたけれども、福沢は「鄙事多能は私の独特」と端然としたものである。私の師匠は戦前の学習院に学んだ人であったが、自分で書類の紙繕^よりをつくる時など、「僕は鄙事に多能でしてね」と必ず照れた。学習院の学友と旅館に行ったとき、唐紙の前に行くとき必ず立ち止まる人がいて、家では唐紙は他人が開けるから、その学友は唐紙は自動的に開くものと思っていたのだという。学年が改まると、今度の担任教師は同じクラスの誰それの「家来」だと噂したりしたそうである。そんな時代に福沢は下駄の内職をしたと広言したのである。

131 ゾウリムシ 原生生物界、織毛部門、キルトフォーラ亜門、築口綱の一属。織毛のはえた外見が名の由来。生理学、遺伝学、細胞生物学、分子生物学など幅広い分野の研究材料として、また教材としてよく用いられる。湖沼、水たまりなどにふつう見られる。

★『岩波生物学辞典』から。高校生になって顕微鏡で200ミクロン前後の大きさであるというゾウリムシを初めてみた。自分の知らない別の生物世界があると感激した。この虫が存在するかぎり「草履」は不滅で

ある。一方、石の下などの湿地に石灰色の1センチくらいの足の多いワラジムシという等脚目ワラジムシ科の節足動物がいるが、こちらは余り知られていない。ダンゴムシに似ているが触っても丸くならない。ひとたび命名された学名の方は消えないが、草鞋と草履の命運は尽きかけようとしている。草鞋には草履にはない長い2本の緒があるが、草鞋は都会から姿を消してしまったから、その違いを知る人も激減してしまった。ワラジは悲しい。洒落ている場合ではないか。

132 片減りの靴に勤労感謝の日

江崎義人

天高く靴のかゝとの今日あらた

大波

★『朝日俳壇』、『例解俳句作法辞典』から。祝日にくつろいだ気分で、玄関におかれた踵の磨り減った靴を見て、頑張ってくれてるなあと感謝する。たとえそんな靴を履いていても、リストラにも遭うことなく毎日働く仕事があるのは幸せだ。そのような苦しい生活の中で、惰性を断ち切るような気分になり、踵の修理をした。すると少し背が伸びて、心機は一転し、精神が高揚する。思わず、高く晴れ上がった空の下をカツカツと靴音も高く「闊歩」してしまった。

133 前足に対しても後足に対してもお前の爪はなんの役にも立っていないのではないか。前足にしたってそうだ。わたしはまだお前が前足を使って歩いているのを一度も見たことがない。そんなつかいもしないものを前足だなどと呼ぶのは全くおかしい。第一、柔らかすぎて固い地面は踏めまい。それに、いつも何も履かずに出歩いているが、たまに何か履いているかと思うと、それが後足に履いているものと恰好も違うし丈夫さも違うときている。お前の歩き方にしても、危なくて見ておられない。どちらかの後足がす

べりでもしたら、否応なしに転ぶていたらくだ。

ジョナサン・スウィフト

★『ガリヴァー旅行記』から。馬のような奇妙な動物、ヤフーの国へ行くと、人間はこのような不思議な動物に見られる。人間が最も完全な動物だという思い込みは、改めなくてはならない。現在の足と履物、とくに足と靴との関係は、他の動物の目からみるまでもなく、不自然で不完全なものである。水虫のクスリを考案したらノーベル賞ものだという倒錯したことを言っていないで、その水虫を発症させず、骨に異常を発生させたりもしない履物を考案するのがはるかに重要で、先決の課題なのである。

134 忘れもしない、1973年、石岡さんから婦人靴店のポスターの仕事の依頼があった。テーマは“シンプルなハイヒール”。何でもないようなのだが、それまで装飾するばかり考えていた私にとって“シンプル”というテーマは難問だった。…

悩み続ける毎日の中で、ある日、シンプルということが機能性につながっていることに気づいたのだ。

高田喜佐

★『靴を探しに』から。複雑な諸機能満載をうたう携帯電話、パソコン、カメラなどには真の意味での機能性はない。靴なども科学的機能をあらんかぎり搭載したものがあるが、買った人は機能を使いこなせず、手入れの仕方ひとつ知らず、ほとんど手がくたせない。自分の靴に自らの手がくたせない靴に愛着は生じない。シンプル・イズ・ベストという思想・真理に若きシューデザイナーがいち早く開眼したのは日本の靴業界にとって本当に幸いなことだった。

135 一番驚いたことは、現代人のものとその形が全然ちがっていることである。長くて大きな親指が、内側にぎゅーっと

突き出ていること。つぎに、五本の指が扇のようにひろがっていて、かかどが細長くどがっていること。

この足跡の形から、古代人は現代人に比べて、少なくとも前かがみの立ち構え（身構えと気構え）をとり、動作はきわめて機敏であることが推定される。現代人は、なぜかふんぞりかえってしまった。

平沢弥一郎

★『'84版ベストエッセイ集 午後のおそい客』の「古代人の足の裏」から。平沢先生は「あしの裏博士」の異名を持っていた。福岡市の板付遺跡で発見されたものだという。下駄と草履の時代、つまり私の子供のころは、大人も子供も扇形の足ばかりだった。「現代人」というのは都会のサラリーマンくらいのもので、米屋、乾物屋、鮭屋、雑貨屋などの自営業者は靴なんか履いていなかったから、扇形だった。田舎育ちの私に言わせれば、「現代人」という言葉の定義は正確ではない。農民でふんぞりかえっている人もいなかった。

136 栄介の脳裡に残っている幸太郎は、着物をゆったりと着こなして、背筋をしゃんと伸ばした小肥りの男であった。今3人の男女にかこまれている老人は、洋服を着て、背中が猫背に曲っている。洋服は古い型だったが、保存がいいのか古風ながら折り目立っていた。かぶっている烏打帽子は新品である。それに比べて、靴がひどくくたびれていた。何年もそればかり穿いていたらしく、底も踵も斜めにすり減って、表面の黒皮の色も褪せていた。彼はとっさの間にそれを見てとった。きちんとしているようで妙にちぐはぐな、要するに典型的な田舎の爺さんの恰好であった。

梅崎春生

★『狂い風』から。ある日、私のうちに若

い友人が訪ねてきて、書齋兼居間に入るなり「すごい古本の量ですねエ」といった。何だかそばにいる女房まで「すごいお婆さんですね」と言われているような気がした。「買ったときはみんな新本だったのだよ」と受け流したが、書齋の主人は古本と感じていないのである。靴なんかも毎日履いているとだんだんに擦り減ったり傷んでくるが、持主にすれば足になれて、愛着の生じた靴をそんなにひどい古靴とは感じていないものである。年をとれば、大抵の人は、すべての新しいものは古くなるのは当たり前のことだと悟っていることも斟酌してやらなくてはなるまい。

137 「私のアルバイトを一つゆずってあげるわよ。しばらく休んで勉強したいから」

佐智は大喜びで、どんな職種かたずねた。「まず社員教育の一種ね。靴屋の従業員に標準語を教えるの。天候にも左右されないし、楽な仕事よ」

…アイスクリーム売りのあとの佐智の職場は市内の目抜き通りにある3階建ての靴店だった。

加藤幸子

★『苺畑よ永遠に』から。シューズではなく“フットウェア”となったとき、靴はファッション商品として、機能よりも雰囲気大事にされるようになった。方言よりもスマートな標準語、標準語より外国の言葉がお客様に喜ばれるので、靴屋も尊重するのである。一文字飾りというよりも“ストレートチップ”、オカメ飾りはダサくて“ウイングチップ”は格好がよいということになったのである。

靴をつくる人も売る人も、言葉に踊らせられないように、片足をいつも靴の実質(機能)に置いてほしい。